グラフィック・フォン・グリューネルト伯爵家

フリードリヒ四世の招請により、グリーンメルスハウゼン子爵が新無憂宮に伺候したのは、帝国暦四十七年も押し詰まった一日。毎年のように繰り返される対叛徒……自由惑星同盟……出兵に向けて、帝都が慌ただしい雰囲気覆われ始めている。軍務省が『雌雄を決する決戦』と謳いあげるのは毎度のことだが、その実、決定的な勝利にも、致命的な敗北にもつながることはない。ただ、失われた艦艇と戦死者の数だけが無表情に積み上げられていく。誰もが内心にはうんざりとはしつつも、過去一五〇年続き、今後何百年も続くだろうことに疑いを容れようとさえしない。そんな年中行事が繰り返されようとしていた。

グリーンメルスハウゼン自身も帝国軍少将の地位を持ち、そして、周囲から意外さを通り越して諦念に近い表情を以て遇されることには、現役の軍人でもあった。

勇武の将でもなければ、機略縦横の才もなく、また神速無類の用兵を誇るわけでもない。よくて凡将下手をすれば愚将と罵られても苦情の立てようのない戦歴の所有者である。指揮した戦鬪で決定的な敗北を蒙ったことはないにしても、前線では単なるお荷物であり、下手をすれば貴重な兵力をむざむざと遊兵に変えてしまいかねない程度の将器であつてみ

れば、前線部隊としてはできれば帝都に引つ込んでいて欲しいタイプの将官である。

周囲からは迷惑視されることには、彼が机上の提督に留まるを潔しとしない、奇妙な勇氣の所有者であることだった。さらに悪いことに、彼が現皇帝フリードリヒ四世の旧友。口さがない廷臣たちは

『陛下のご悪友』と囁き交わすのだが、であり、皇帝が『あのものを従軍させてやれ』と宣え、臣下としては苦虫を噛みつぶしつつも平伏して承る意外に選択肢はない。と言つて、下手に最前線に出して戦死でもされれば、それは一個の戦略部隊の全滅を意味するわけで、戦線の均衡を一気に覆される端緒ともなりかねない。また、『皇帝のご悪友』を戦死させたともなれば、皇帝陛下よりの思召しの良かるうはずもなく、ミュッケンベルガー元帥などは将官の名簿にグリーンメルスハウゼン子爵の名を見いだすこと、その配置に頭を抱えて苦吟するのだと言つ。噂に過ぎないにしても、それが噂以上の真実を語っていることを、何よりもグリーンメルスハウゼンの麾下に組み入れられた将兵たちが知っていた。

おかしなことに、下士官以下の下級将兵の間でグリーンメルスハウゼンの評判は悪くない。というより、グリーンメルスハウゼン部隊への配属が決まると、将兵たちは自らの幸運を大神に感謝するのだ。ミュッケンベルガー元帥が子爵を決定的な局面に投入するわけはなく、と言つて使い捨てにするわけもなく、結果的に比較的安全な戦場を任せられる上に、万一の場合の手当までしてもらえるのだから、彼らが生き延びる確率も高くなるうつつというものである。

皇帝は、『ご悪友』を謁見の間で待つていた。「参つたか、グリーンメルスハウゼンよ」

声に艶がなく、張りも薄い。

この時、フリードリヒ四世はまだ五〇台半ばであり、若い朽ちるような年齢ではあり得ない。実際、グリーンメルスハウゼンの耳に入っている噂では、またしても新たな寵姫を後宮へ入れた。それも貴族とは名ばかりの、平民も同然な市井の娘だと言つ。

にもかかわらず、華麗なほどの玉座に座す至尊者は、一〇歳近くも年上であるはずのグリーンメルスハウゼンよりも、更に老いを重ねたかに見える。

「お召しに預かりまして。この度は、臣も出征の名簿に加えて頂けましようかな」

「出兵の件か。あれは、シュタインホフとミュッケンベルガーに任せてある。そちは此度は帝都にて留守居じゃ。次回を待つがよい」

「さて、心得ぬことを仰せで。臣の力など、もう陛下は不要じゃと、そう仰せになるのでございませうか」

「一度出征してしまえば半年は戻るまい。そちが帝都に居らぬのは無聊の極みじゃ。まあ、いずれ手柄を立てさせてやるゆえに、気長に待て」

「まことに以て不本意ながら、陛下の仰せでございませうれば、こはしばらく腕を撫し、髀肉の嘆を託つことと致しませうか」

「髀肉など、どこにも付いてもおらぬくせに、相も変わらず口の減らぬ男よの、そちは」

空気の漏れるような笑い声はフリードリヒ四世のものだった。笑い声からそのまま大きくあくびをし、大儀そうに顎の下を掻く。手許の鈴を鳴らし、侍従

に白ワインとグラスを持ってこさせる。

「どっじゃ、付き合わぬか」

「有り難き幸せにございますが、この後、軍務省へ出仕の身でございますれば……」

「出仕したところで大して為すべきこともあるまいに。何を遠慮しておるのやら」

「これはしたり。臣は陛下の忠良なる臣僚にございませぬ。何条以て、神聖なる軍務を怠りまじゅうや」

「良い、許せ、戯れ言じゃ、グリーンメルスハウゼンよ」

皇帝は、チーズを口に運び、白ワインのグラスを傾けた。大きくアルコール臭の塊を吐き出すと、虚ろに見えていた目にやや生気が戻ったかに見えた。

「これも許せ。予はまだ朝餉を摂っておらぬ。この程度は口にせぬと、薔薇の世話もできせぬ」

「さては西苑で長く過ごされすぎた、とお見受け致します。新たな寵姫をお入れになったとやら」

「つむ そうです、それよ」

「は …？」

噂は事実であり、フリードリヒ四世は三ヶ月ほど前に、アンネローゼ・フォン・ミューゼルという一五歳の少女を後宮に入れた。

「あのような下賤の小娘、いずれ三月もせぬ内にお飽きになる」

宮廷通で鳴らしたグリーンメルスハウゼンであつてみれば、そのような悪意に満ちた噂をも逃す謂われはない。悪意と、それ以上の期待に満ちた噂にもかかわらず、フリードリヒ四世のつま先が新たな寵姫の許を向いたままで動かず、西苑と宮廷がある種の驚きと、苛立ちとにどろわれつつあると言つことも。

廷臣たちにとって、皇帝の後宮の動向は、一五〇年にもわたる叛徒どもとの戦いよりもある意味で重要さにおいて優っているのだ。

叛徒どもとの戦いに敗れても、戦禍は帝都には及ばず、上級の貴族が戦死する例は稀少である。平民出身の将兵が一〇〇万死のうと、二〇〇万斃れようと、彼らにとっては書類上の数字でしかない。

一方、後宮での権力の移動は、それだけで一〇人単位の門閥貴族の生命を左右し、ひいては数百人から、時には数千人にも及ぶ廷臣や高級官僚もまた、その人生の浮沈を左右される結果を招くのだ。

フリードリヒ四世の言葉に、グリーンメルスハウゼンは大きく顔をしかめて見せた。

「伯爵号をお与えになると？」

「そうじゃ。西苑に館を与えるにおいては無位無冠というわけにもゆくまいゆえの 典礼省にも調べさせておるが、いずれか、血筋の絶えた家門を嗣がせるか……」

「まったく新たな伯爵家を起こさせるか、でございませぬ」

「ことが男爵家か子爵家なら、まあ、難しいことではないが……」

「なれば子爵夫人程度となされはよろしうございませぬ。なお、陛下の寵がお続きになるか、陛下のお子をおもるやすれば、その時にこそ伯爵家の門地を与えるがよろしかりうかと」

「子は産ませぬ」

「は …？」

グリーンメルスハウゼンは視線を上げ、既に数十年の時を共にしてきた旧友の表情を見つめ直した。

「あの娘は、予が子を為す代わりに失つには余りに惜しい。覚えておるか、シュザンナがことを」

「それは、陛下……」

人差し指を口元に当て、グリーンメルスハウゼンはわざとらしく首を竦めてみせる。ベーネミュンデ侯爵夫人シュザンナの最初の子供が死産し、二人目が流産した時、根強く流れた噂を知らぬ者は、新無憂宮には一人としていない。『犯人』として名指しされ、疑惑に包まれた人々の名前もまた。

再び空気の漏れるような声が、皇帝の口元から漏れた。

「男爵夫人や子爵夫人では、周りの者がアンネローゼを軽く見よう」

「御意、臣も子爵でございませぬれば、なかなか軽く扱われてございませぬ」

「皮肉を言うでないわ、グリーンメルスハウゼン」

「されど、それは陛下の横紙破りと誹られましようぞ。シュザンナさまはもとより伯爵家のご出自にありませぬれば、伯爵夫人をお名乗りになるに何の不都合もございませぬんだが」

「それよ」

「は …？」

「じゃからじゃ。横紙をな、破つてみようとしておるのよ。横車をな押し通して見せてくれようとな」

「それは、その、アンネローゼ……さまのために、でございませぬかな。陛下のご寵愛をお示しになるために」

「それが一つよ」

満足気に笑い、グラスに更にワインを注ぐ。既に白ワインの瓶は半ばが空になりつつあった。

「今ひとつある、とおおせにございますか？」

「分からぬ、という顔つきのグリーンメルスハウゼンに、皇帝は大きく笑い、グラスを傾ける。

「今に分かる。今は、予だけが分かっておればよい。そちにもいずれ語らうほどに、今はアンネローゼがためと心得るが良い」

「しかし、伯爵でございませう」

帝国騎士や、辺境男爵などは異なり、伯爵家ともなれば門閥貴族と呼ばれる大貴族の一員たる資格を主張でき、その帝国に於ける希少価値は宝石にも喩えつることになる。その多くが有人惑星を含む恒星系を所領として保有し、私兵の保有、納税の免除、刑事犯罪に対する不逮捕権など、数々の特権を与えられる。ベーネミュンデ侯爵夫人はもともと伯爵家の出身であり、新たに所領を与えられることはなかったが、その実家は、ベーネミュンデ星系の周辺宙域での様々な権利を与えられた。その巨額の収入はベーネミュンデ侯爵夫人シュザンナの、後宮での巨大な勢力を支える最大の武器となっている。

「陛下のお気持ちをお示しになるのであれば、新たな名をお与えになり、格式のみ伯爵家のお扱いとなさるが宜しかろうかと愚考致しますが、いかがお考えでございませうか」

「ふむ」

僅かに考え……と言って、相当量のアルコールを摂取したばかりのフリードリヒ四世がまともに考えを巡らしているのかどうか、グリーンメルスハウゼンならずとも甚だ疑問だったのだが……皇帝は小さく頷いた。

「よいことを聞かせてくれたな。して、何ぞ、よい

名前はあるか？」

「と急に申されましても……」

「そうじゃな。予としたことが、何を慌てておるのやら……では、そちには良き名を選んでもらおうかの。アンネローゼに相応しい、涼やかな名がよい」

「ご無体を申されますな、陛下。臣が、そのアンネローゼ……さまとやらのごことを何も知らぬこと、重々に承知でございませうに。その臣に、相応しき名を選んで来よとは、これはまた、これ以上のご無体がございませうや」

「何を狼狽うろたえておる、グリーンメルスハウゼン。耳に快く、不吉の意を含ませ、前に例のない名をいくつか携えて参れ、そう申しただけじゃ。そうじゃな、二月ほど猶予をくれてやるつかの。良き名を携えてまいらなんだ時には、そちを予備役にして、予付きの侍従武官に据えてやるうほどに」

「これは、これは、ご難題にて」

「いやとは言わせぬぞ、グリーンメルスハウゼン。予とそちの交誼がゆえに、こつして頼んでおるのじゃからな」

「御誼、恐れ入りましたでございます」

アンネローゼがグリーンネワルトの名を与えられ

グリーンネワルト 伯爵夫人 人としての地位と礼遇とを与えられるとの布告が典礼省から為されたのは、その二週間後のことだった。皇帝直轄領の有人惑星系がグリーンネワルト星系に改名されて、アンネローゼに与えられるという噂も飛んだがそれはなく、代わりに帝都星に散在する何力所かの荘園がグリーンネワルト伯爵家の所有に移されたに留まった。

名もなき市井の少女に伯爵号などを……と一度は

上がりかけた非難も、これで拍子抜けする形になった。アンネローゼが、皇帝の寵を独占するばかりか、伯爵家当主として経済的・政治的にも一定の勢力を確立することで、後宮のバランスが崩れる。その結果、自身につながる西苑や宮廷での勢力に驕りを生じるかも知れない。非難の多くは、そういった本心を衣の陰に隠したものだ。

グリーンネワルト伯爵家に与えられたものは、確かに確かに一般の庶民から見れば途方もないほどの収入を約束するものではあった。しかし、大貴族の一員としてみるならば、その足許にも寄せぬほどの僅かな内容でしかなかったのも事実なのである。それが分かってみれば、非難の矛先も鈍るうというものだったのだ。だから、フリードリヒ四世が彼女に西苑での居館を与えた時も、これを問題視する声は大きくはならなかった。そうでない少数派の存在は否定できなかったにせよ。

そうして、グリーンネワルト伯爵夫人として与えられた中で、アンネローゼの生涯において大きな位置を占めることとなるのがフロイデン山系の山荘だった。